

部会長の就任にあたって

北海道大学大学院理学研究院 佐田 和己

今年度から二年間、田村類先生の後を引き継いで、部会長を務めさせていただきます。まだまだ若手メンバーと自分では思っておりましたが、この十年で有機結晶部会創設時の先生がつぎつぎと研究の第一線から退かれるなか、ふと気がつく、すでに有機結晶部会創設時の若手スタッフの一人として、いわゆる第二世代の一人として責任ある立場になっており、今回、部会長を引き受けさせていただきました。どうぞよろしく願いいたします。

有機結晶部会とのつながりですが、1990年に当時岐阜大で助教授をされていた宮田幹二先生（現大阪大学名誉教授）の研究室の助手として採用していただいたことに始まります。そこで初めて有機結晶のもつ高い機能やその集合状態を分子レベルで調べるための強力な手法である結晶構造解析に触れることになりました。特に当時この分野を強力に率いておられた戸田芙三夫先生や大橋裕二先生から結晶場を用いた洗練された分子認識システムや高選択的な化学反応、結晶空間内での分子の動的な挙動など、さまざまな興味深い現象について教えていただきました。当時は有機結晶が分子集合体であることすら、一般の有機化学者や高分子研究者には受け入れられておらず、その点から説明が必要でした。X線結晶構造解析も気軽にできるものではなく、年2、3件の解析結果で満足しておりました。さらにパソコンのグラフィックスも普及しておらず、結晶構造を理解するために、結晶構造の投影図をプロッターに平面図として打ち出して、それらを見較べて頭の中で三次元の構造を組み立てることが必要であり、結晶中での有機分子の機能と分子構造と結晶構造の三者の関係を明らかにすることが容易ではない時代でした。現在の状況と比較すると、今昔の感に堪えないものがあります。現代化学として、この研究分野をどのように発展させていくのか、そのために何が必要なのかをみんなで考えていきたいと思っております。春季年会や有機結晶部会シンポジウムなど、折り触れて皆様と議論を交わすことができたらと思っております。

研究分野のことだけではなく、昨今の世界情勢について先行きが懸念される中、日本の経済も長期の不況下、これまでの資産を利用しながら、なんとか持ち堪えてきた組織がいよいよ苦境にたたされる状況になっており、大学や学会なども例外ではございません。昨年前部会長の田村先生からも報告がございましたが、有機結晶部会においても舵取りが非常に難しい時代になったように感じられます。こちらについても、みなさまと議論を重ね、対応を協議していきたいと考えております。

最後になりましたが、前部会長にご尽力いただいた部会の組織改変を引き継ぐ形で、有機結晶部会を運営させていただき、さらには若い方に積極的に運営にかかわっていただくことで、議論を深め、有機結晶部会の活発な活動につなげることができるように尽力したいと思っております。

どうぞよろしく願いいたします。